

巻頭言



会員 3 万人時代の学会誌

板倉 征男†



情報処理学会をとりまく環境はここ10年で大きく変わった。会員3万人時代を迎え、メンバーの大衆化、ヤングジェネレーション化の傾向が顕著である。新しい時代の学会誌は時代にマッチした変身が必要と考えられる。

当学会は1960年4月に会員300名余をもって創立され、1990年には30周年を迎える。この3月には、会員も3万人を超え、わが国有数の大形学会に成長した。時代は今まさに情報化の本格的到来であり、学会の発展は諸兄・同志のご尽力のたまものと敬意を表したい。

しかるに学会活動の基盤とも言うべき学会誌はというと、10年この方ほぼ同じスタイルで編集されており、この辺で抜本的な見直しをという声が強まっている。

現状の本誌・論文誌の2本立て構成は、1979年1月、ちょうど会員が1万人を超した時にとり入れられた。本誌を切り離した理由は、大勢の会員を対象に平易で読みやすい解説や啓蒙を論文誌とは違う観点で行うねらいからであった。果たしてこの目的は、現状で達せられているであろうか。

この10年で情報処理の分野の応用面の発展は目ざましく、社会活動の中に大きく根を生やして来た。今や県知事がOSIを口にする時代である。会員の構成も学者・研究者が主体で実業に従事する者が従であった当時から、現状では3割対7割と逆転し、後者、すなわち非研究職への従事者が過半数を占めるに至っている。また平均年齢もここ数年間、毎年1歳ずつ若返っており、やがて31歳代にならんとしている。このヤングジェネレーション化は他に見られない当学会の著しい特徴である。

一方、学会誌以外の商業誌が普及し大衆の求める情報をスピーディに提供する手段が多様化して来た。

このように学会をとりまく環境は大きく変貌した。学会の使命も特別な研究者グループの啓蒙の場から、わが国の将来の基幹産業に従事する知識労働者を包含したより多くの階層から成る会員をリードする場へと広がり、以前とは比べものにならぬ社会的責務を帯びるに至っている。

これにともない新しい時代の学会誌本誌は、次のような方向転換が必要であろう。

- (1) 学会誌としてのレベル、および中立性を保ちながら、思い切り分かりやすい記述を追究する。
- (2) 先進的、または横断的なサーベイ記事を企画の中心とし、親切編集で掲載する。
- (3) 時宜に合ったテーマをよりタイムリに掲載する。
- (4) 若い学会にふさわしい若い発想が反映できる企画を行う。
- (5) これにともない表紙および編集も斬新なイメージにチェンジアップを図る。

以上の内容は現在私が担当している学会誌のあり方に関する委員会で識者の意見交換の結果をまとめ理事會に報告した提言の骨子である。

今後、前向きに学会誌の改善を実行に移すべく、関係者のご尽力と協力をお願いしたい。

(平成元年6月2日)

† 本会理事 (株)NTT データ通信